

献心、献身、心配りの人

鳥越輝昭

日本語に「献心」という表現はないが、あえて「献心と献身の人」と言うことにする。中島先生は、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし」、身を尽くして神奈川大学を愛した。この献心・献身の人によって神奈川

大学が得たものは無限に大きい。神奈川大学は、今後いつまでも、この人に感謝すべきである。わたくしが神奈川大学に赴任した三〇年ほど前、まだ助教時代の中島先生について誰もが口にした冗談がある。「最初見たときは、てっきり体育の先生だと思った。」……中島先生は、大学の文化系教員には珍しい、堂々たる強靱な体軀の持ち主だったからである。

驚くべきは、その堂々たる強靱な体軀に、まれに見る強靱な知性と意志と、まれに見る能弁が伴っていたことである。わたくしのような、すべての点で正反対の人間には、別世界の超人に見えたものである。早くからすぐれた研究者として名を知られたこの人が、なぜか長年にわたって神奈川大学のアドミニストレーションに献心・献身された。神奈川大学にとっての僥倖だったといべきだろう。

わたくしがこの超人と身近に接したのは二度、中島先生がまだ助教だった時代のわずかな期間と、学長最後

の任期のわずかな期間だけである。それ以外の長い年月は、超人は当然ながら、わたくしなどの生息する領域とは、まったく別の領域で活動されていた。

第一回目も第二回目も、不思議なことに、中島先生と短期間身近に接したのは、新学部構想にかかわるものだった。

外国語学部には、はるか昔から、当時学科に所属していなかった教員のあいだに、新学部構想・新学科構想があったのだそうである。その何段階目かの構想をつくるさいに、理由はわからないが、わたくしも案作りの一員に加えられた。比較文化学科という名称だったろうか、わたくしはそのなかのコースの概容とカリキュラム表をつくったおぼろげな記憶がある。そのときの構想案づくりの座長が中島先生だった。

新学部案は、学内での数度の議論ののち、箱根の保養所に合宿して仕上げた。メンバーが、それぞれに意見を出すのを、中島先生は、あざやかに整理し総合して、完成案にまとめあげた。傍目に、その手並みに嘆息したものである。

結局、このときの案もふくめて前後のいくつかの新学部案・新学科案は、すぐには実現しなかった。しかしその長期間の積み重ねは、外部的条件が整った二〇〇六年に、人間科学部と国際文化交流学科として急速に実を結んだ。この学部と学科は、中島先生の「brain child」であり献身の子だったのだといえる。

二回目の新学部構想では、中島学長のもとで、わたくしは深澤徹先生の補佐役として、比較文化学部というようなもののカリキュラム案をつくった。考えてみれば、二〇数年前と同工異曲の案をつくったわけで、進歩しないものだが、それはともかく、この案も実現しないで終わった。しかし前例もあることだから、いずれは深澤先

生などを中心に、中島先生のふたつ目の「brain child」が生まれるのかもしれないと、わたくしは思っている。

じつは、わたくしは中島先生が苦手である。しかし、苦手であるということと敬意とは異なるので、わたくしは中島先生をところから尊敬してきた。一体、新学部構想案とか新学科構想案とかいうものは、構想段階から、いくつかの組織と多数の個人の相互の利害が衝突することが多い。わたくしは、教室と会議場とを一步離れた瞬間から知的道楽の世界に遊んでしまう人間なので、案作りや利害抗争から、できるだけ早く逃げ出したい。だから、構想案の検討の場を離れたらすぐに別の話題に移ろうとするのだが、中島先生の話しは、またすぐに構想にかかわる事柄に戻ってしまう。その点で、わたくしは中島先生を疎ましく思うのだが、同時に「献心」ぶりに敬意を抱くのである。

中島先生については、もうひとつ、「体育の先生」とからかわれていた時代には、わたくしがうかつにも気付かなかったことがある。先生は、「献心と献身の人」であるばかりでなく、「心配り」の行き届いている人である。超人の別世界（学部長、副学長、学長時代）の中島先生とわたくしとのあいだに生じたニアミスを二件記す。

以前、英語英文学科に国弘哲也という言語学の大家がしばらく勤務されていたことがある。無知な若輩を啓蒙するのが面白かったのだろうか、わたくしはときどき一緒に話しをさせていたことがあった。その縁だろう、別セクションの人間ながら、わたくしはこの先生の退職記念パーティーに招かれ、末席をけがした。英語英文学科のなかでは大家過ぎて疎まれてでもいたのか、学科の先生たちは三〜四名しか出席していない不思議なパーティーだった。中島先生は、おそらく学部長として招かれたのだろうが、敬意と感謝にみちた、よどみないスピーチをされた。中島先生はこのような機会に欠席することなどなかったのだろうし、学科主催で退職記念パー

ティーを開かないことも不思議だったのだろう。よそ者として出席していたわたくしに小声で言った。「英文科の人たちは、何をしているのだろう。」わたくしの記憶に鮮明に残っている一言である。

もうひとつのニアミス。学長時代のことである。場所は、非文字資料研究センター。中国からの研究者数名とセンターの関係者と同席し、学長にも出席を仰いだことがある。その際は、学長が、センター側の人間たちを紹介し、わたくしを「多数の研究業績のある、神奈川大学の誇る高名な研究者」と紹介された。いうまでもなく、わたくしは神奈川大学に誇りに思ってもらえる研究者でもないし、高名でもないから、直後に、学長の紹介は正確ではありません、と訂正した。中島先生は、ときとして、行き過ぎるほどに心配りをする方なのである。